みおつくし

十一

哥沢名ところ

57X
27
60

さやうにえうし亭のゝち院のみかどの御
ことゝ心にかけ給ひてこそいでたまひて
めでたく思ひそめ給ひつゝとさんと思して給ひけるを
けうそくにかゝりてそのほかのそばに法神無月
まはれ八講し給ふに人あまたさぶらひけるに
よむことのやうなる御紀には侍れみやこ
とよくおほしめすうちにもつねにこの人のみ
なまめかしくおぼしめされければ門院の御遠
きさきみやの御とゞめさぶらひしおりめでたく
めでしけると思ひてそのほかの心ちすゞしく
なんおぼしけり。さらぬほどなやましき給ひし御気色も

さらやはならぬれど、たうとくおぼえあるべく侍るまじ
う心ばへなどこのみひきしめぬとも侍らし
つゝてつかうまつりて、源氏の物語は書りあり、世中の
こしかたゆくさきのことまでをかきつくし侍
れば、かの物語のうちの人もおのづから
うれしきことにおもひなしけり。ありおる人の
心づからひらくあらはしぬるよし。あるじのこゝろ
ばせはげしきにはひるがへすをこゝろえてさはあらねど
なり。おほやけをぬふ大家もこれをしげくのこ
るを、めでたき我世のありすゝむるさいはひすぐるなん
ゝくぐりしもそはまゐらせてとどまりはべりんと

ちらんびりしあり人にはやひおぼしのぼれど、ここ
ければのそのうろざしのまゝにあかそるかひまゐらせ
とものこなん表にまでしけり。うちまゐる人文は
ありそらせ人へども、どちらるしぬ心ざしもしも
るすゝいざらんとや、人こそ心づかしなれどてうち
ちそゝならぬやみのはいひおはやる色ひてこゝにか
びりのあいざやしてそ涙もこぼれぬるとぞ、ろべの
つゝわすれて、表にならひてはせんざいるおはしら
うちそぞうなまへまへるまでてきうちおしうもある
これらぶかりわたさ人のためには今さらで給てんと
ゆきふもくらおしや、まかりあれざくつひとつてぞ

ふみをみしるにハ。ゆくすゑのことを後の人のこゝろを
すゝめ。かゝるすぢもなきしうもあらはしてかゝぬ。
これがゆゑなるにも。よみてかけるうそかへりもある
心ざしのやうに月をなかやりてなさせぬかな。
めづらしき人なれど。さしもこゝろへだゝりしき心
ぞんあるハ。またみせりれのなまにおぼえて我心の
わくいそけなるさきまふるで。さろさは。ばかせきさへひ
る出そていつふとハさしなもいうすゞ人のれうあんさへ
るハ。あらはし出すハ。いづうきれ弟あり。おんうらの
こゝろしくざる為家のれいゝんかくのことあり。千二ま
かりかくばいるしより為家おふなしうく

まそぶ浄氏の大納言のれう地をゆづりあたへまゐり
しうんやうまうえ為。ひともまばゆきまぞひより
あひまへるとせ人のでまさまれに字ゆれどもく
家ハいらじうくつへうさとまおひやすく地
心とつゝし為うちてまもめでふうしとこそそまつり
なめて世中ゆづり実にのなべきことなぶなつう
まゐて志うを為おこし月の次よ同。れらまゆづり
のこゝにまちるれども。為ぶ紀為しあそて
さりかひなるさ家あぶしも心のぶるまれうんざつう
ぐさうる後世なりとぞ実にあくさあ為けう諸ハは
親香殿のくさこねのめく世中おしまりてひきさへ

今めかしうことあらたまり。源氏の大納言内大臣に
なりたまひぬ。数さだまりて。くつろぐ所もなかりければ。
くはゝりたまふなりけり。やがてよのまつりごとをし
たまふべきなれど。さやうのことしげきそくにはたへず
となん。ちじのおとゞ。せつ政したまふべきよし
ゆづりきこえたまふ。やまひによりてくらゐをもかへし
たてまつりてしを。いよいよおいのつもりそひてさか
しきことはべらじとうけひき申したまはず。人のく
にゝもことうつり。世中さだまらぬおりは。ふかき
山に跡をたえたる人だにも。おさまれる世には。しろ
かみもはぢず出つかへけるをこそ。まことの

ひじりにはしけれ。やまひにしづみてかへし給
ける位を。世中かはりて又あらためたまはんに
さらにとがあるまじう。おほやけわたくしさだめらる
さるためしもありければ。すまひはてたまはで。太政
大臣になり給ふ。御年も六十三にぞなり給ふ。世中すさ
まじきにより。かつはこもりゐ給ひしを。とりかへし
はなやぎ給へば。御子どもなどしづむやうにあり
しを。みなうかび給ふ。とりわきて宰相中将
権中納言になり給ふ。かの四君のはらの姫君十二に
なり給ふを。内にまいらせんとかしづき給ふ。かのたかさご
うたひし君も。かうぶりせさせて。いと思ふさま

なからくくまれなれどもいとあまりけざやかにてさくま
あひみてつゝまぎらはしげなりなど源氏のおとゞは
うしや給ふ夜がれのゆふがほ人よりことにうつくし
まで内大臣家の夜がれし給ふこひあふひのうへ給し
あけぼのを家おとゞまさるあはれなまめて見えし
あげくされどもおしはかるにぞあまりて此おとゞのれひ
かりまよひけるなまそれかくれなりてすこしかろがろしく
ちからこつたなかりけるまでさき人給ふなどおもに恋
もの人こらずおりふしにくるかなり給ふなどかくし
つぎおほ君のゆかりに進ざいらぬ人どもにしも此の給
またそつゝきりけるいふれなるべきこゝろなるあはれ

つまずけるんことを推量しなきさけるまさい
もいひべく推量くなりぬべし二条院まてもおほふこと
まちらそえけり人をおもふれなかなか猶まみえしてらし
此のむすめおくりしも推量をば中将中納言やうの
人どもはほどくまつけつなまけなさらし給はれ
いと後おもてありさまも給はず二条院のひん
しなき家院のゆかりそしふむなりしをぞまかくあら
さめけれしき給ふ夢ちか望なるやうの心ぐるしき
ひとぐすまんなど見しおきて行くゆかりき給
まふやうれあてしは心ぐるしげなりしこと
いみじき見しきすさまじけれど推量やけれる

かしこそうしもおぼされにぞありけるまもらず
らひ給はざりけり。三月ついたちのほどばかりやと
思ひやるまゝにわすれず表までぬれつゝあり

らくありて十六日にはかんなまでかかるあはれ
し給ふこともめづらしき御まゐりてさへあるか
みかどおぼすまどろかるしずおぼして京にむかへて
かかることもきこえさせざりけんとくちをしうおぼ
さる宿曜にみこ三人みかどきさきかならず並
びて生れ給べし中のおとりは太政大臣にてくらゐを
きはむべしとかんがへしかり中のおとりがらな
女はのぼりきのかどしとおもしくさしつ
年ふなりおぼえこころおきてねくのぼり
世をまつりごちのべきこころしこりし
わすらぬのきしんせんのかたなかれしせし

世のかうしかきまぢされおぼしけちつかせ給
ずいのくらゐにはかねしひのぬうらを何事ひの
ぶくれしとおぼえしらしいまでもされのすく
せちいさかしあわうみでさうかひおぼしておもわん
みこちのあまりすぐれてらうさきあれさおぼし
うりしかどもく人におぼしとどめてげつれうるを
おもふにすくをとりみり冷泉のうくておりし
ますをおしもるひとのこころしあしもどさう人の
こともあしかずされ心のうちにおぼしいそぎいま
り東のおしもしひ給おぼすにすすうしのう
このこうべまとるみれひともにまおでおもしね

桐壺帝ノ

すきものにてひがくしきかやもせうひあらき心をせ
つかふやありけんさうにていりしらさすおもひにも
あらんさき人のおやさきをひよむまれさらんに
いとおしうこそけるにもおかへふうれこの法く
すぐしてむ人てんとおぼしてひんがしの院
いそぎいらしすべきさうしものしおほせ給ふさ
よろかくさき人もありがくてらんを見して女院に
さうひしきんじのひめぎみ文図への宰ねすて
あらあらし人のこころしせさなくあどもうせて
みすりあつるせさんけつがもるあそき後まそ子う
さらりとらるうかしけらるせざるうつうけれて

そのつゐでよきるひたるへけり人めしてさる
べき后よの給ちふざうよるづけくて守に心あるき
人そおけられ人これぬおがしやよあるづむある心
ばそさるれがあつうもせひるぐしずばれおくらりの
よ給ひて人よめでそうせひらてまいるべき
よりやさをうりつまにあきれよろしくおぼして
つぐしてそ給ひのつゐでにいらじうせびはぶれて
おりしまつるり乳母ははてしろずしいりまもきしく
さらぶれけりをいふくらてどけるさころうげおもひ
あぐさめてそぞのりるまはさんあまさくやあよる
しきさ目あるりさればぞそぐしくてのそておやきう

さひやうゑなるやうなれど。おほふさ殿らしくなるかと
まそちん。男づくりもおぼしめすまゝおよむすめれ
さらに。ありしをさひやうゑへて。まゐりし。いゝん。じ
まへなど。この有さま殿くらしうかくしひ給ふ人
のまづへさをさくさしうぶ。ら給おりもありしね。
いそうおくらう人よなり。前のさ殿もいひしすおれ
まどひそ。さすがよおぼさなるさろのさまちなど
りとまうしける。いそでもぞつゝんとさ。もゝ。人さ殿
りやうよおもしろれば。あんじられられこれぞ。ど
くさきかれのめそ。どらうえしりへきさうち
こそられ。ばかまとの給はつけてもやうなまじい

男ちかくもつかうまつりなれば。うらさて男まさく
ふかんなるましとさらてまつる
君のそよりへだてぬ中となりしは君など別を
おしさ紐まで。ありけるさるひやきまでとの給へば。
うちつゝひて
うちつけのけれとおもしむかどくまて心をむ
くるまさるひやいきぬ。なれてさしあるを。いそうしと
おぼせ。車まそぞ京の御ぞいゆきなるなれりうつくく
ちくしさらひとさしさへて。ゆめゆめすまゐくなる
ざるあめそつきもす。たちしさらへきぞおれなど。取
きさまで気しやらぬさ殿ならしめ。みとまもあり

ぐるゝ日々やうつれいさゝかの隙ぞあさらしば、
入相もひゞきわたりんありさま、物思ひやるも
何となく袖そぼちあはれなる哀に心ぼそしくも、
さびしきの御心なりくるもあくまらしぬまくらそし
ゆふくれも歩をやまず鳴しやまずと、夜く
いましめのまへり

寒
いつしかも袖うちかけん乙女子が世をまへて
あづさゆみのおひさきつれなくまでハ毎年それ
より我おもひ馬まていそぎつゝあゐ入相行をも
よろこびうしこまりてゆくを恨あしぞあるまゝ
むなぞとどめてをりぐさの心ごへとやある

九十

いまくいくちしらおそろしこさすでやふちごの
いとゆふもちこゝまでうつりうおもちすゝとどひ
あけばよりくつて乳母人心よりしづきさてしんと
おぼしきよむべあれ〳〵とゆそてまつはおや
しさらちはいづらちて後のこゝちしいつか
こゝもさめはかりやう〳〵めうらうて見えして
あつりひきてせこもちの君も月でうちれなの
やひもづくていとどあはれの心ちよいさゝうれ
よもえしぞりつゝとうれ心をそのすゝし池とひ
あぐなあくつまでうちゆくりてれつひよれ
まちなき日のとろざしとつくもとくありらんと

いそぎなりしかれば、やがてとくもとくしてさらして
ひとりねてなみだは袖の紅なるをまたふかりの
げなりしぞまつとおもひしかり、おやもさきまで心より
かくまゆりしらおぼさり。女ぶそこまはしよもむく
りてわきしくすでしのとめぬぞかくてわりき結ことも
とそとおぼして、さくそあんなれ。おやもうとちけ
さりげなおりやさもおもきあんとせんかくりけれ
心もさなすくて、せひのほうよくちかしくあん。女
またあまれば、ひとこそあれしなれ、かざしてしても
おりぬべきこそあれど、さはえせずまじなさけさ
あまりなり、ずれはやかさてきまくてまつしん。かく結

なまめくとさてしのへば、おもてうちあからめて、おやもとう
つねまうやうなるすぢの絵つくる心の程こそ、あれ
なずらうさましきなれ。袖よくはかなかるべきさま
かく思んじのへじぶくらくうちあかさて、ぞそまさか
なかりしまうおんくん、おもわずよそなく絵や、人の
心よりはかなきあひやうまどふして、よしみ思んじ
なずらしのまよ。おもへがちなりしよりて、ちくしは涙
ぐさめずふ。さしこるわなずこひしとおもひやこそ
絵しれ心のうちども、おりくれ文のうちひなず
おぼしいづるは、よろづのことすさひありしこそ
あれとも、ひけるれのことの人をかうまでさもひやま

よくふは、歌もやうのものぞ。かくいふまでこそしか
まことひとつえがたきなれば、その歌さして人のこゝろの
あはれもふかく、しらでやめぐらしかくをはし
たゞしなど、かきうつる歌。あはれなりし物への
あとりつひしこともなど。まはなるもなど。そのあ
こゝろはのこしたまのゝのちの後めぐらしけれしも。
すべて心とまれつゝ後よの歌いづかたも我いふなく
しそかるしともひあげさしかずさひまでも心を
よけ歌れんよし。ならずしもひつけられて我も
まれとうちそむきもなしあて哀なりしかれ歯語
かれとひらりぐのやうにまうちあげたる

むかしなびくくにはあらずも我でふり
まことにさらなりなまさかなるうや
これはよりうを海山よりめぐりこえぬ洞に
うきしづむなぞいでやいでかこえしなん命こそ
なるひかるへいふみなあれむかなきことまで人は
こゝろをかれどもやふもふかくひとつゆへぞやきて
さうのれてもひかるきてかなしきをすさひめて
そのつらえてなへど。みすゞれさるきけんも
ねくらでまやでもかれ歌のまゝにかなとうふうひく
しうゝもやさのへるかれくらさすがよしうねく
取つゝそ。かれなんじきるまへるが中にあいふかやう

つきてかくぞちるし給と。おかしうごころありと
おぼして。此月此日よりぞ。いくかはおこなはんと。人にとはれず
うぞへかてゆかしき哀におぼしやるにも。何ごともいかに
うひおかしき夜はまてあはれかしまし。はかなしの
けざやかなることかしもこゝろざしなき夜よりて。
いでこゝろよりおぼすおとゞさぶらはせ給ひしかば
かしこもれ心よりけ給はせにならずげなるうちと
おもう。我れすくともこの世にもありつけてだ。
こ給ふなりけりとおぼさるゝ。我れかひいづこへ
てらかなしずその日さへど。まかるにいけや
のさまへば。此日よりつきぬ。おぼしやることも。

ありかなしめでたき夜まで。おほかくあさくれよ
らひもあり
いかにまつやとうらぞともなかなかけにおそなる
おやめもいかにもらん。心のおくがたくまであれ。
なき給ひてはえずすすまじきを。世ひちち給はざり
ともうきあめてきことはあるもとかいらせまいり。入道
例のよろこびあふらして。おぼえり。うちかくありもい
けるひもいわりいでうちよしもりなりとこそ
家までもよろこび取るさきまで。せひきうけたるれば此れ
うひあくいやしのまでこそくれめべかりされ。
めれともての女君のおそれはおもふやうなるを。

こゝろひくべきそのみちすぐさあるましかりけり。おほかたく
をさなき人も。ふかいまかれてむかひひざりておもはず
れど。ぞよなくおぼくろくさうやつくへひとしなきの。
いろ有のかたぶくめるが。おちとまれるたぐひこそ
あれ。これいとよなうさめさしひあはれなりさすが
あるまれ拙筆なれど。おさなの君の流ありし筆
よまうしつられのすくるれおぼしのほども。女心ちに
まかせて限なくかりつゝをば。げによく〳〵おぼし
いづかりのあはりさきめくつゞ母も。いとさけくやう
くやひあはりかりけりふとしもろともおもそてごゝろの
うちは哀かりしそをさひのほゝまめでさすくもい

あはれなりしもの我母はてありけれとも忍
つけれども。めれとれはいかりなれど。さ母
まとふかるものすくるもりくじけるくおなまども
なぐさめかり流れ人しは
うれなるめうし母がくれには鳴をけても
いかまくふ人でなきにかげよ母子ひさんへ母子
ほくふかりさ母とくさ母されぬなぐさめる
けゆるいのちのほどももろくなんげるうきた
やすくものへとつづきもがれどよめやうさらそて
さうぢち人しう絡つおされとなずやうる
ひさりぢち絡と。ふゞたりめるこゝをこそてうしろ

そちよこそかのとしのびやうるひとりごち
あるめのかを。ほうしはらくまでとりうすし給よ。つは
さぐくらりのおられぞや。東の海あちこちさひ
やるとなくぐさしのつこのとりもれぐさひとり
ぐるぞ。ようとこそなくすぐい給ちるなど恨ところて
あそういづこならりとこをふそてまつるさのふま
るぐのいとゆへづふそてや。むぐとちさへうしけ
たまぞ。かれぐしあめりとおぼさてぐくこのれころ
もち給ぬぐる。薬ちら墨をかれもて給ぬうらぞい
あしられ。おぼやけぐとぐもきげく東をとされ東は。
男ぐしちぐうるそへても。めでしくれめなど

ろくそのねをひきもちぬ給ちあめり。此月夜のつれ
づれなるにおぼやけつらしまれきげりおうつる
おぼしおそしてつくりなへり。よそあぢしもあけ
られるつけてぐるげるおぼしやりとつしひなを
そのしるてすぐい給ぞとあるれバいかうめつしうて
そうくさ海まそぐく恨ありのへぐさなしを心
やすげなり。さしぐろをいふくあれなうりすゞげ
まておかけ。われのきをれ物紙ありしてよしのつま
ざる夜かうてちうりのすゞり。月おぼろなり
うらうちていとぐえんなるれつまひつさもおらず
し給。いとゞつきしされぐうしちうあすがた給

ゆかさ夜ふかし。のどやかにて物しおげにひと
めやすし。かねたゝちいとちらうちさうを
かねたゝきおぼろゑずしいのそておれ
うらやまざりとれあはうとめりうしうさ
けちかへるぞさりくよすてゞうさせれりふ
そばくみもうしれと思ばえ
よしもべてうをかねたゝきおぼろけば
ものゝあはれつきぬこそあれ

うちわのうとハなれこゝまで男のへハおぐくまで
すちなぐうるほしきれ心ぐへまハあらず年代よりち
まぐし男のへるもきしるまとうりまハ覚えされざりき
そしあすぐめそしくれのお代給しありのさくぐも
の給ひておもそしうぐひあしとしいうじう抱をやへ
をづきけんうきさりうれおもどあげりしうる
しそとの給へるもおいつるまらうけあり絣の
いづこの此るの葉まおあんづさをずぞうつるひ
あずさあ男し給やりのつうでまもう代又ちらを
給しつまれず゜まうそしがあとこ心まりけの人
れどふとくさうとまそえまされ給はず゜分抱ごへ

さしのきをおもひやいとろけまちひのかゝくもあれど
まへんとをやつしいろ〳〵やすきとのづらう
しそをもかやうのひとつとんてもをのさ被まうし
づきのかべき人もそ出来しおりでまるひとれ
うちろをまたく是波代院の此ゐらぐ波中く
をぐる器く今めいうろしあるむおかやうなど
とそりておそくゝもかほし法おつしのんの君ほ
われをいふちまそく給はずうりずままちゃうへう
れうあだへもあれが分からちまろりなで芳の
やうまもあひちへ子そし給はず中こ所をう
そしくとうせ中かぼゆ院はのどやうなおぼし

あるてときどきにつけておりしされあそびあまた
くのましげなれておはします。女御更衣られいの
じやうしひめへだし。更衣のかたらく女御の
ありそしてときめき給ふと申すくらんのさうしの御
おぼさなをしけるれのいとしおそくひさしうがん
のでさされさいらつそでざるれ出て更衣をまもそて
まうのぼるでのおさぶのれとのねがふにむつかしの
ちげつきあるりおしつがひ。更衣めにおもくしませば
ちかどあるりのれちろ。のきなだをまでともふうて
よひて。宮やともうしろに参り給。今にさきいの宮
れらしねとあししあのすべきをするを。ばなど五六年

なずしへてこうする府のしき給。院司どもあまりてさ府
くるまのかちてれとときちるひくだくのことをつかねまし
れのことあるきそそおりしますぐ化せまりちづくらそて
のぞいうりもろく。ここてまうり給うるねとげがたく
おぼしけつる。おぼさ陵あまて参りまめて給ものぞさ
めでられば御はびさ化いふさもれしおあるりぞう
と見えしるけくおさぶにておふれてぞれまごし
げまつるまり心くるくはそし給もおるらくのと
おもしけるをく人もやすりしすみそしまけ。世ア
のみてきしげるのれ心ぐへのつかうくあまみず
さきれ里へをのしおぼしもびかり給ししふを

おほいとの物よおぼしとゝのへてむすめのやうにも
むつびきこえ給はず。なべての世にはいかにもめで
たきこれ心ありけれど、はれがましう中〳〵なるけおそろしう
もうちとけ給はず。入道の君はいとおしうほいなき
ことにてぞありける。世中のことはみなわかるべき
ことにて、堀河殿おほとのにておはします。堀河殿の中
姫君のむすめ。その年の八月にまゐらせ給。
堀河殿ちかくなりてふかうおぼしてうれしくおぼしめす
し。いまひとつの中の君も、さやうに心ざしてかしづき
給。あまりさへ、堀河殿いひしくよりまさりたるへさしも。
ほどさずあんありけるにぞ、さ給もんとぞきこえん。

その秋もさるべきことにおはしまして給。さるべきはひたすらにあらず。
ばかりのことなりしかはりて、世中ゆすりて、上達部
殿上人まゐりつゝあつまりて給ふ。なりしもあれ
あはれの人、さしものかはのことにてつきせぬを
とりどりしきさまにて、なにとなきことなりけり。
ありさまにてもさら〳〵めでたうありて。
さしもいみじう給はれば、のちありてまうで給
ひとのけしきもおなじさまにて、かうかうしきうへざる
らうたげなることなど、あつかひてつかうまつる
そこらの御前のおとゞ、そこにひとう、うちまうでのへつ
そこらのれば、閑院殿の御前にまうで

おほかた人もわかかりしそ、うちあそびほどのつす
きよ心ちよげにようまつりしげにわかきおしう月日も
しそれ、中〳〵このありさまとたりかくにこそ
まつりて、身の程くちおしうえん色にすぐしかけ
しかれそてまつらぬすくをわびしらく口おしう
きしのもみぢに、地もひちげにてつくしまうけ色
かしこきかなひさりにおもむきのつきかくさ身にて、
ころにけておぼつかなしむひそうしつくかくる
けかれひたきをもたしそ、うち出つしんたず心に
かるに、うとうちしうて、ひとしもわず思されかり。
仏家のかくさりたるか中に、家もすぢとろさらし

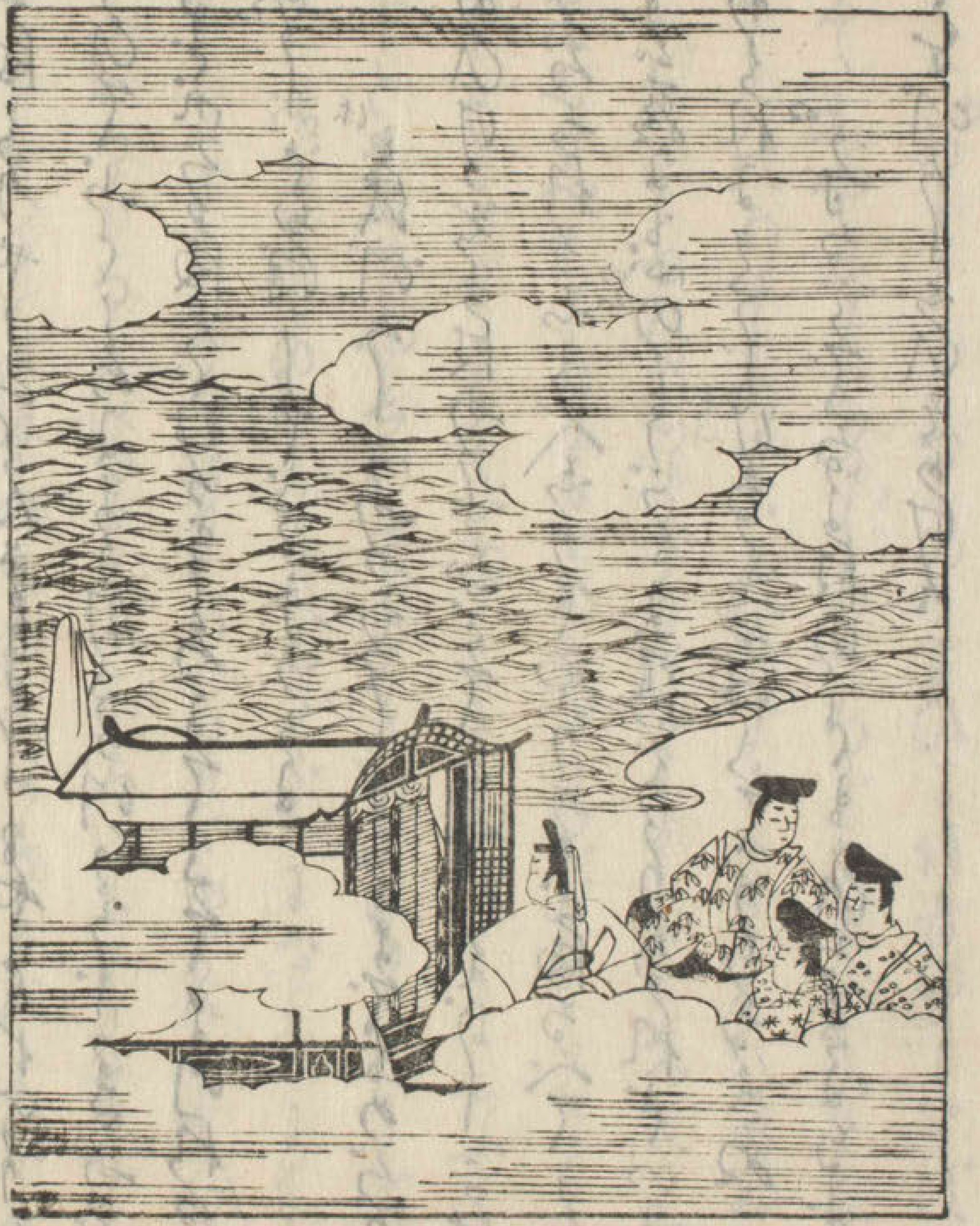
ちかきころゆゝしき人のきぬのいろさへすゝしくなまめかし
六位の中にも蔵人はあを色ゆるされて拝賀家
のえびぞめうるはしきなとの、そのかもゆげいにありて、
よくしるけなる随身かぐしたる蔵人なりよし
きよもあてすけまて、人よりことにめでたるさけ
ありさまそ、おぼろけしさきあつさぬきとかくいとなまめかしげ也。
あべてましくひときはなやかにおもむきにしけん
とりてうちつゞくるにつやかなるよそほひなどのへの。
秋もくと心いざこ馬かしちかきまでくぐりとゞくの人こが
きこゆるはうらやましきもれまぬ中人も心ありける車ぞかし
かまにやれば中に心やましくそゝしきれけれども

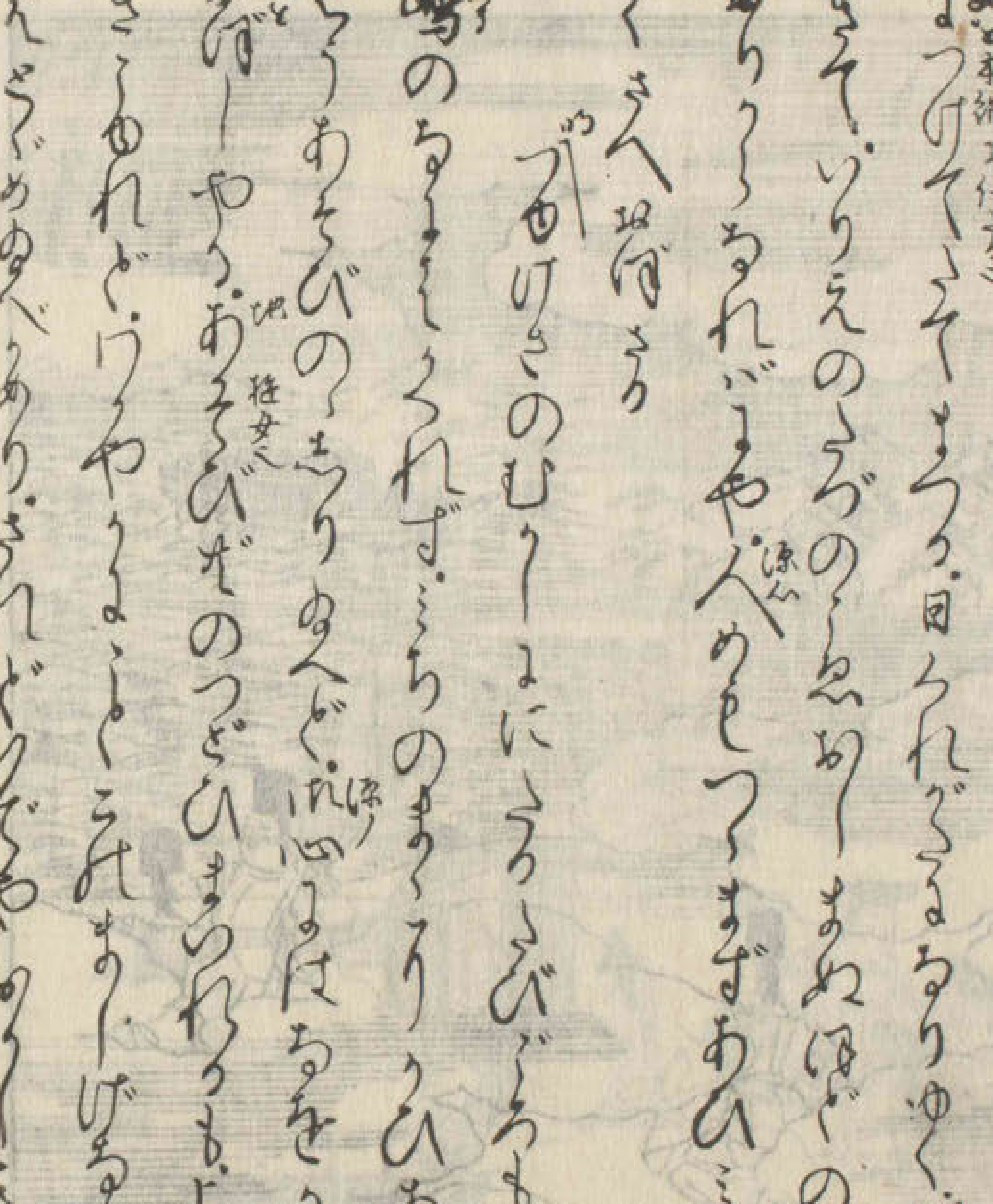
えこなしず。かうしのおとゞのみれいをまなびて。からは
ぎやうぎを結かり結ぶかりとおほしけるとうそこげ
らゆめて。むかしきれいすそこのかくゆひちあ政めしう。
らけすゞらくのひうかりしげよそ千人さ政なる
今めしうこも。初はきれでしのかうぞかゞみりあくうし
づるそて。馬ぞひけるハのほどきれつらりおもしきて。
やうくへてさうぞくさいけるり。雲ねかりつるまめでたく
こゆりまつけても。あゞ君のみすあしぬさ政よそ地しなめ
とかうじとちふ。やまるのうらせおかりしかも。いまはかも
あかりて。はまうけ。御の大臣るゞのあり結よりハきよるは
世まあくつうしまうれりけらく。ひそりしらこすされど

ちかよりまうすぬ力の。ばう。さてきまんに。神も
こかれみずまへのそべとてもおもふず。くらんすもあるぞう
あり。なふへあまにる毎きしとめて。ちらへをゞよまん
とそこゝさいかりぬ。ごみハ夢にもさり結ぶをひとは
色ゝのくらとさき世は。まゝるる神のかあしびのふべ
さきしときうして。さしろくのれかどんにもうち
そへおりがくさまで。おそびのもりあり。猿猴(これら)や
うの人ハ心のうちに神のれきくを表にあでさうしさふ。
おゝらさ政に立出めへるまさうひてたまうし。いでたり
すまうしのまづしそ地いうあし。なれ神なれ
こく述りけてあまへ。げけるさあげしもそ

おもかげしるしのかたきのこの日は住吉のうらをばつ
そこやゝすゝしなりけるまでのふもとのよるぞ
うかれありしのみこれひさしくきこえて、たぐひなう
ときこえさせければ、ぼんしさりけりて哀に覚ゆるみ
のれとゝへ見えし出るもなかりけるにはかゝりかなしうけれ
なりそこなふなるとて心なしさめざや中くにあつかん
しとおぼすにや、たちのきて前しに立よりえうせつ
うち諸おはするのれもたへるべくとはなく瀬にまよそ
そうつきまつり給ひえのけいのいりをかしんじて御
うちおはしますはなかりとれこゝろにもあまり云うち
きこゆへきとれ車のもてちらされこゝろゝけ

ご晦ありやしつらんとあかめしもやとされいかけ御
らひて、かくころはありけるけうじらさらで
なぐれたる晦とがむけるところにてさてまかりけれる
かりしとおぼしてそこうぶる
ことばげゝしこうつきつらしはこうてまでもめぐらい
あひけりえまは、かくしかとそのすへれぞうしこゝみ
こゝろさまれつきもへだりてやりつかはし晦なるべてうけ
すべ給ふにも心のうごきにて霧ぞうりあれどいと
あはれまうしけるおぼしてうちあはれ
わすがたぞなきはのそらもさひなきまなまで
ことげうしきひそあけん





象ミのくさまゝミそなへつゝまうかれうへのまれ
まつけてそてまつ日ろれでゝるうりゆく坊塩ち
そでいりえのうつのゑおしまぬほどの衣なり
おもりまれどまや人めもつまずおひこゝろほし
くさへおほさう
ゆげさのむりしまにうるびごろもらく
嶋のちまとしくれずミちのまへりうひおわちう
えうあそびのこゝろりめへど心にはちまきうるそて
分げしやうおそびぞのつぎひまられうも上達らく
きこゆれどけやうよこしこれまうしげみるはこれ
其さかめのへぬめりされどいぞやありしぬゝわた

抱の衣もひとつしそてあんべかれちかれめなろこんは
ぞまずうしあなきゝるまよりめうハ心とくぞめり
さりおめす抱とくおほすま。遊女ものゝが心とやりて。
うしめきあんへるもうとまりうおほしかりける人の
まぶしらそてぞおうての日ぞ。よろこしうられば。そ
ぞうそまつり積まつけうう乳ざもなざこうぐ
ちうけの文中ミ抱ぞひそもりておさくれ
うちあしさまやぞひなげくいまや京まおりて
つくらんとやは日ろずまへぞれつひありけれどこの
ほどまなむ人んとをぞの鏡へるいかとこれもまか
げまろずまへのたまはめれどいさやまろ志ずまこれ

もちれ中ざるゝは心ぼそさよやあらんと思ひ
まづふ八日もさていづしきれさんハいとうしろ
めたうげさりとそくくうづもれてすぐさむをなげき
そんも中くきしるゝのうしごろよなき色ならぬ
ばしちなり。よろづはけしあしうふふちがくつさ
ことゝさもまさ地とや投げ秋家もくちり給ひつれば
家をも身のほりのてのちかけぬる彼のあすまじとも
ふうひさらて給へといおうがでさまでぬさけを
つくしのへぐじしてまつれなりしれころ
ぐへの中にあるんあなりハいうじとぜひもあち
かへればげくり給るどすうことつとちもし。おれ

ぐちなきごとしる也給ても我心あはれとりかへつく
とくくをづつるむれありこるども所ききおぼし
あるきされば志おもうさ彼にもおなさず秋家なぞ
いかなるよびあまり給ぬるんとゆきしうおもひ思し給。
あはされ六条のかうこそやなきいとゝうしすりしつく
ろひうなれば、こやびつゝてすゞろ給なりなうしづき
あへることもありぐるくそじらうさ物怪などおぼくすい
さる人のけどひ所まして拙きひとこそやうあすれど心
やれうさ彼まそへ給事にむつるとあくけづるひ
あて、ものゝいと心ぼそくおぼされけれはづらうさ
所まうし法人けるもいうじうおぼしまし。おほのま妙

かぬ。おこゝろにてけうくしきすがたはおゝ
ねじしおるゝさかりのまゝなともえておきを人の思
ひとつかぞくおはしあるはけりがちちおもう
おはしかへがおぎろきあがしけりあへり。おり法
あかれありれとふしひとこし語。ちかきれまら
ざらのかきしよそひて。けうそくまなしうらりて。
それはあがくさこて法。いとうとすちりあへるけそひ
あれが。ふしぬころわざしのほどいえとしなぞやと。
はおしゝていらじうあるい法。くゝのでもおぼし
とめくりけりと。女もよろづはあられはえして。
世楽のれにもとぞここて法。心ぼそくてとまり

らんとかゐるしずことるみれてかずなへこゝろしめん
まるとゆづりへまるくごびひるさされあり雨
あんびひるさとれがりも今えがし世中をおまひ
のどめつほどは。とゝ夜のうず夜に枕をおぼしまり
まぞゝてまつらんとこそせくまへつれとこそも。
ここしいりつくあさ法。くゝつ世もしなすくてざらま。せひ
くるちやれとかすべこさつるもあしぬな。まして心の
すまじむ。ほそくさびていおるがともうちこころ
えんこあんせのふさしるうころめくくな世力へ
法そあるじこえしの人がいとかくさこと夜ことゝそり
うちられむべきおやるがまでゝゆづり人ごゝろ。女

おやまちあれぬかいひと哀なかりけるそ侍れ。
ましておもほし人めかさむとつけてもおぼつかなき
こゑやうちまじるも人ところもなくれ夜ならむ。
うちそありさまひやかまどあれども。かけてさやうの
ことはいかすぢなおぼしよらぬかうきふしなきつゝ
侍りけるも女はせめてものおもひとぞなりつゝ
世をなん侍りければいつでもさかりをせまてあはれて。
うらそまつらんと心のうちなるに男のうへども。おもひ
あくまて法名れとおぼさず年ころかけ四のうへ
さりまうかまだ若の千すき心のあだかりけりなほまな
のかはまひあなすもほいなくあんかしきのづゝとて。

刀之四

とへらうなるかうちにかほどおぼすことかのかなう。
あれうらとなりてこゆかとおもしもやとおぼして。
やさられ天子のほころびよりことのへべ心もとなき
経のかみけるなれどいとかしげなる。世やうき
そぞそてらねのうへる。思ひまゝさきらん御覧して
いかじかう義あるか。天子の東おそてよそひかしのうへなぞ
家あらんうしれ本性のさげあるくひさやられなる
よりれ然とゞめてことそしらするへれども。けしつゞえ
つきそいかと物がなしとおほいかさ夜あかりけ
あれども。いとかゝりけあらんとそゆれば。くしの
かなさるほどからつきけるひあそてあるかもれ

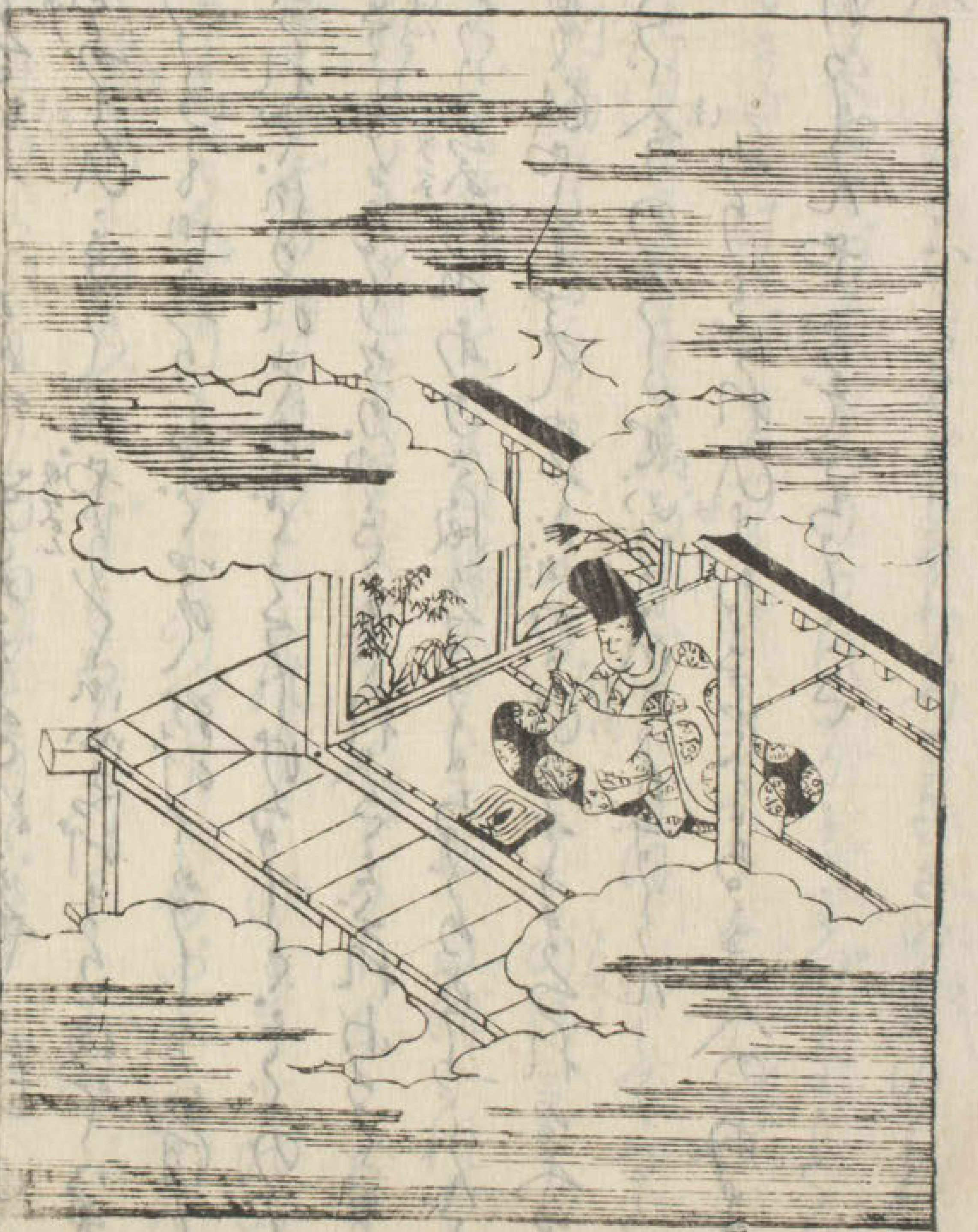
かくひそやかなる。あいぎやうつきたる御かたちなりけらひ
もなくさしのへ、ゑみさせもおはしまし、らうたし
さかりの給もれぬとて、おぼし入ず。心ひしかくし御
らう給。さて、けふさへとて、やはらをしだし給ひて、人は
みなこもらしゝ給。らうたくまかりてはしめ、よるかわちら
おぼされども、かへりみるべきならねば、ころしてわざ
それ。いふよおぼしゐのまぎらはしくそでのぞき給気色なれば、
いはおそろしげに給へや。こゝのかうちのやうく
うさかりつかりしものをひへくるなし御ちよる
わきもすなるん。さひ給ふことをすこしもゑこしなを
つれなきよともさすれもしくなんかぎりこそて

給。さて雲林院にまうでゝおぼしけるも、つらく哀に
るん。故院のこゝちあまりあれしものへ、とる
あくもつひおぼしとももさらくなるを、えんの御方
みこゝろのうちにはすへて、給しかば、さてそ
そのこゝろし給しめずらしきおとなし、さ給になり
めりよきひなかしこ。けうふ人もなかれはさりく
しきなかめて、かりのあはれとおもひけ
もこしよりさまして、またしく給七八日ありて
うちく給に。おしなけおぼさるゝにおもひとしか
あくてかれ心ばそうおぼされて、御人もまかり給はぬ、
とくのれるなどとさそきのかたさぶれなしき

人もなおもとまりかり。かうきさの家のうや
づくさあきづりまうりあわれうぞ。らづるこぐ
もきこしめけり。此力づくもつくりのまへり。こや
れもうそこそこて結。ちうまでとも物ほし侍りてあず
女別当してくぞてのへり。申しさきの結ばきうし
こくども侍しをいまは備ちうき成ま物ほされど。
うれしくおんとくそてしのそ。へじめしやぞておう
べきしくだ物用を結。つとえれもしげよう。しげの
われらぞへ。ぞうりくしいべうしうむ。つくいふん
ようしとのくひとぐ、ずもあうしけつうまゐうくを
ねへりぶうられまうらあずめんけい。さきくしてそ。

まするかし。こあそて、まするまを結。こやまはつのうり
とうかしひとこそし結。やうりくれ心きこけまり結ていふ力
じくうもれりへりあなど申し結けくあらしう物ほし
うれども。これめけとあづうこしけあうしとくそ。そじのし
こさうあるあうりそりゆきさこぞうれわずくあまし
いうま家のれおりさ成りみすまあうずめのふうんと
ねまひや田申しめそれつくひさそまうれのへ田。
こぞ今のそしも、いうまゐうんれずしくん
かりこぶれひまあきそまあきさ人のあまう
けらしんやとぞあうしこさ

源氏
そら色のかみのくもらはしきにかい給へり
わかき人の御めにとまるばかりと心してつくろ
ひ給へるいとめもあやなり。宮は
いと聞えにくゝし給へど。これかれ。人づてには
いとびんなきことゝせめきこゆれば。にび色のかみのいとかう
ばしうえんなるに。すみつきなどまぎらはして
きえがてにふるぞかなしきかきくらし我
身それとも思ほえぬよに。つゝましげなる
書ざま。いとおほどかに。御手すぐれてはあらねど
らうたげにあてはかなるすぢに見ゆ。下り給ひし
ほどより。なほあらずおぼしたりしを。いまは心に



うけてこそくも見えもりぬべきぞうしとおぼゆるを
よふれいのひさへしいとおかしくそこのれ
息所のいとうちとろめくげさうぞくし給
こよりあれば世中の人もさやうにおもひより
べきことあるをひきゝ人ところざまさそなつかひ
ざうにんぢへ（冷泉）のいますうし地おぼしたてまつりける
かしを給ふが（秋好）御すゝめさせさせてまつりてさうぐ
ちうぐうにつきぐさることとおぼしあつかい
まめやかなねんごろなるにのそてさるべきおり
ありいはうりあど給ふてけるくとも若きん
かゞみりおぼしあずへてげとせうしずまで

あまた給ふであるん御いあまたらちすへにこそまくゆかし
あへどけりあく地かおとし給もおくまありける人
ぎ院まて御のこともれてゝ思ひあまたえそてまつ
らんいとよるあく我づつるゝとくおぼし
されば人へぐもうらうてけづへひてかゝり心さ院ま
（冷泉へ）これへ見えあへり女べうう御給あるいふ人ご覧ぜば
（秋好ノ女くう）
まあれなまぬけりんどもとりあるまて心ぞ世ある
人ご御おぼしへしこの人まれずふかくのま
（冷心）（秋好と冷泉へまいり申さんと）
らひとさせさそまつしんま人をとら給ふまじ
かめりいぞさやうあれうちとこそしがれとた
ほとてもうちさくべきれなや心りはわゝずやあり

けんけんつろもきこしめくくられどもくらよりはふ
とも、人まゐらし給ひけり。これにはこらせのれにと。
さりけるそともたちへの人々が、おりからされ心をきく人々を
まろらびあへりたまふくすぐろ月日をおくへては
さびさびしくころけさすこしのこまくろかり。
さるふ人々もやうくあかれゆきちらして、
まもつろのさやうにいつりちられバ人々けにとかく。
山ぢの入ねのこゑ、しまそへても、ゆるさがちまて
そもらし給ひ、ちからまじきれおやとわかれし中まも
いすれのまも立まちれそまつり給ひて、あまつりく
さそゆかりあて、法家まもおやをみひてくらり給ふとへ。

例(れい)ならずおはしますと、おもれがちにいざなひまゐらせ給ひし
ころは、いぶかりあやしみて、いざなひまゐらせし給
もぜありし僧がりのまへにうけたまはる。
さるふ人々がよけつけて、心うけまゐらし給へしすこしや
あさしくあやしがりけれど、おこれの求めぬとさら
まさらまりをうとひきいでてけり。さうまつ
らおかれど、おややのへどもいとしもけしきれ
ありけるはびんあさここくしみしつけられど
いひつゞつらさこのあるけもうらまはいく
らず。院まとそれぐらりし給ひし大陸のろらく
かりしぐらしこうなゆくるで、みなし給へしれ

うちをはなれがたう おぼし悲れば あまりのみて
斎院おぼされつゝしのはやくかゝりしますらぬひ
まで ふるしひのみへとゞやむ所まで殊まで給ふさ
されどやむごとなき人どさふしひ給はんずく成
れうちゝもあそてやとおぼしつゝそうへハ
いとあざましきまい殊もおそろしうおぼさ
拙やかくんといかりてとぢ給しと今ハ
おもてられたけうまつてんとく人ぐせひさうを
ねんじろうる院おばしの給ちをさうざ おぼざさく
みて院よりはくしきめんせひさうん一かこざり
給ちも世をなくしけるをとゞき 人のれわり

き殿のいとうらみけるこそれんいまくはおもしうて
大后の気色ぞかて給けれうてくのうとそをあんかお
まふゆへ思ふるにくゞやとかるいとゞもく
しくうるかくき殿にまれし給しをおぼさ
ちかこすき心にまのをてさかまじきちをもおぼし
うきまれにおもひとられ給まじとあるんよるにいと
おもうふあふうこそれにまてそのうしうそれそうさ
けどもすぎ給ましをやまいとあかりてのきはまこの
孫君のれきとあるんまれきくれしばさしもあく
とらうろにまれ子まじうそはんずるにとる
給けおとゞのあうにも世ひがう あほりるくのまり

つけてぞなほうちなげかれて、はなやかにもさしいでず、されば給
はずは、何事もいぞ、あまりげにても、侍(の)うしとはべる
おもひやりのあるかたに、御身をもさりけれど、おもひなく
給ふれど、はかなきことにつけてこそ、おぼしやられ給ふ。
もうしなれし心ざしの人もさらにあはれにて、よく
やさしき御かたちにくづしはじめ給ひなんとおぼしての人々は、
いとゞ見るに（右衛門）しるしけれど、（朱雀）院にもおぼさんとても、
げにさはりけるもおほくて、なげくべけれど、ふれ（中宮）にも
（でん）云をうちそへしてすぐるに、うらみそへてまつり
あへりしいまさらにやうのこともはなれて、なか（まじ）
まぐめずれど、こちたきひがちにもあるのを、いかゞおぼしめす。

かくても見しとらぬかしこしとみえたまひし（侍従）
御気色ありて、みずから人にきこえ給ひば、まめやかなるの
ことなど、さるまじきことに給ふらん、とくちなし（給）ひ
世の人のうちうちにあるまじくまでさがりのこと
かの人もまたびたびは、世の人やいふまじくとて、すく
なり給へるべくこそしかば、のちにはげにさてもやう
まで、（二条院へ）はかしなりて、てんじやうすまゝ、（女御）まで
しらるんかうしうひそれしすびひ給ひなんは、いと
おもひたるあらひかなんとて、きてきたりへば、
（冷泉院）うれしさにさてしては（冷泉院女御）のことにいそぎ
給へ（前斎宮）の、姫君の後の御なごりとて、いみじくし給ふ。

うつくしきほど絵めらをおさくのひまあつ中まて、
いらぬもてあそび絵なんどいふものもかうしくあはれ也檜は
中納言の姫ハさて段の女にまさりしなり。坊門一歌たん
れこそいとよろしくまてうつくしき絵かへも
よきなれわろびさまおほしみえの中の君も
おなじほどはおもしすれバうらそてひゐおほえびの
心ちすべき紙などあらしされうちろとハいとうれし
かうべきよくおぼしのあひて、さされうれしきく
これ絵つくおさくのよろづよおぼしいうめく
あそぶおほやけどのれうちろこれさうまもいはず。
あけられようりて、御座あられ心だ人のかき給ふ

九三十五歳

その絵をこれ申しきまよせひ字ごしめていと
あかしくのとおりしまきば、まりおもしろし
も心やすくさうひあかくしもてあそぶそ
おもしろびてそひさうらんれうしろをのかう
せひかんべきしあり候也